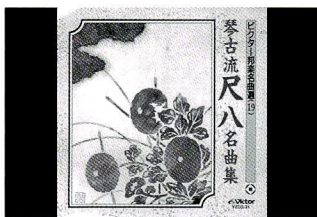
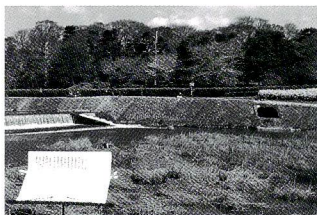


道具といえば、もちろん尺八。これに尽きる。職人に注文した逸品から、愛好家より贈呈されたものまで様々。材料は竹とカエデなどの木があり、音色も微妙に違う。竹の方が馴染みはいいが、「中途半端な竹なら木の方がまし」だから



「琴古流尺八名曲集」との出会いが、尺八奏者への道を進ませたとと言っても過言ではなく、吉田さんにとって思い入れの強いアルバム。琴古流は、西洋音楽にはない東洋的かつ神秘的音楽として世界的にも高い評価を得ている



自宅だと周囲に気を使うため、練習場はもっぱら葵橋のもの。自然豊かな川を目の前にすると気持ちがいい。自然豊かな川を目の前にすると気持ちがいい。自然豊かな川を目の前にすると気持ちがいい。自然豊かな川を目の前にすると気持ちがいい。

information

第貳回「のどけき春の尺八リサイタル」

日時：5.10 (Sun) 19:00open/19:30start
 会場：ZAC BARAN
 京都市左京区聖護院山王町18
 ☎075-751-9748
<http://www.secondhouse.co.jp/zacbaran.html>

料金：前売1800円、当日2000円 (50名限定)
 満席により入場不可の場合あり
 詳細はZACBARANまで

尺八奏者 吉田公一

YOSHIDA KOUICHI

78年、兵庫県姫路市出身。大学進学を機に入居し、22歳のとき、友人宅で尺八に触れる機会を得る。その後、主に海外で活動している琴古流・倉橋義雄氏に師事。伝統を踏まえながら、ジャズ、ロック、民族音楽、即興など様々なジャンルでのセッションを重ね、また自らの作曲活動にも積極的。現在、京都のライブハウスやバーで定期的にコンサートを行っている。

京 KYOTIAN I.D.

京のおきばりさん

取材・文/山田涼子 撮影/石川奈都子
 撮影協力/SOU・SOU着衣

自己表現ツールとして最適なのが たまたま尺八だったただけのこと

一日休めば己で判り、二日休めば師匠が判り、三日休めば客にも判る。それが、尺八。ゆえに、彼は一日2時間以上の練習を欠かすことがない。練習が苦じゃない、それは尺八に向いているということ。「どんな楽器でも向き不向きがある。僕はたまたま尺八に向いてただけ」と、気負うことない自己分析。

彼が尺八と出会ったのは22歳のとき。友人宅である寺で、はじめて手に取った。当時、結成していたバンドのメンバー全員が体験したが、一番音が出なかったことに腹が立ち、「ガンガン吹いたら、こうなりました(笑)」。かのジョン・レノンが死の二週間前から尺八を習おうとしていたという逸話があるほど、尺八は外国人に親しまれている楽器だ。実は、奏者は国外の方が断然多い。

そんな中、尺八を9年続けてきて、「尺八奏者」という肩書きを有していると、尺八界の未来を担うといった煽り文句を突きつけられることも少なくないのが実状で、そんな期待と欲望に違和感を覚えるという。尺八に魅せられたのは事実だが、尺八と出会う以前に10年続けていたギターと比べて、機能的には決して特別に優れている楽器というわけではない。今の彼にとって、曲を奏するとき、つくるとき、メロディラインを尺八で表現するのが最もしっくりくる。ただそれだけのこと。後のことは、聴く側に委ねられているというわけだ。「以前、フランス人に『日本人はダメね』と言われたことがあるんです。外国人は尺八をエキゾチックなものだと受け止めているのに対して、日本人は先入観に捕らわれすぎ

ている」と。なまじ身近だからこそ、古典的かつ老練なイメージが抜けない。そのくせ、生の尺八に触れる機会は希少とあれば、そうなるのも仕方がないのかも知れない。弱いように聴こえて、その実、「耐える音色を持つ」尺八。それは至極「日本的だ」と彼は評する。

哀愁を帯びた音色、力強さ、伸びやかさ。それら、尺八の素晴らしさを知ってほしくて、様々な楽器、ジャンルとのコラボレーションに取り組む。例えば、ピアノ。レンジが広く、バンド一箇分の力とどんな曲にも対応できるキヤパシティを持つピアノは、最もタッグを組みやすい楽器だとか。来るリサイタルでは、ギター、パーカッション、ベースなど、オールソドックスなバンド編成のほか、ジャズピアノニスト、沖繩三線奏者、シタール奏者、そして師である倉橋義雄氏をゲストに向かえ、ジャズやロック、沖繩民謡、古典曲を披露する。ただ合わせるだけでなく、尺八の魅力が出る選曲をする。陰鬱な曲には長いもの、高音なら短いもの、と数本の尺八を使い分ける。こそぞというときは着物を着るが、ジーンズなどのカジュアルスタイルで演奏することも珍しくない。「もともと洋楽畑なんで、尺八も邦楽のジャンルのひとつだと思っている」というフランクなスタンスこそが、聴く者の心を揺さぶる独自の世界を紡ぎ出すのだろう。日本に住まい、日本文化の中で暮らす我々にとって、尺八は不思議と郷愁を誘う音色を響かせる。そこに、何故という明確な理由などないのかもしれない。そして、彼はその懐かしさを恥ずかしくない。必要がないことを教えてくれる存在だ。